社会的隔離事態における共在他者が親和と遂行に及ぼす効果

黒川正流・坂田桐子・来嶋和美・神山貴弥・

小島美樹・藤原武弘・生和秀敏

広島大学総合科学部情報行動科学教室

(1987年10月31日受理)

The effects of other-presence upon affiliation and performance in the socially isolated situation.

Masaru KUROKAWA, Kiriko SAKATA, Kazumi KUJIMA, Takaya KOHYAMA,

Miki KOJIMA, Takehiro FUJIHARA and Hidetoshi SEIWA

Abstract

The twenty one groups, each of which consisted of a P-confederate who played a task-oriented role, a M-confederate who played an emotional-supportive role and a naive subject were employed in this study. All of the three participants entered an experimental room which was completely isolated from external environments and performed the same task for several hours. In the eleven of the twenty one groups, the P-confederate went out the room after one hour and then the M-confederate went out after two hours and finally the subject was left alone (PM-condition). In the other groups, the M-confederate went out of the room first and then P-confederate went out (MP-condition). Subjects tended to show the highest unpleasantness and subjective anxiety and the lowest morale for the task when they were left alone. However, there were not any differences in this tendency between these two conditions. The subjects showed more familiality to the M-confederate than to the P-confederate. While Ss' evaluation on the M-confederate's task-expertness decreased when he went out in the MP-condition, this evaluation was not changed in the PM-condition. Immediately after the P-confederate went out, Ss' demand for other's task-oriented behavior increased in both condition. Although, subjects decreased their evaluation on the emotional-supportive behavior of M-confederate after he went out, they did not change their demand for other's emotional-supportive behavior. From these results, it is assumed that subjects performed the task as a coping strategy for the stress and anxiety which caused by a socially isolated situation.

外部との連絡交信を遮断された社会的隔離事態は一般に人の不安を喚起したりストレスを高めたりすることが可能な状況である。社会的隔離のストレッサーとしての心理的影響力を実質

的に規定しているのは以下のような要因だと考えられる。第一は，孤立の様態が個人隔離であるか集団隔離であるかという問題である。また，集団（複数）隔離でも，共在他者が親和的関係にあるか非親和的関係にあるかで，明らかに異なる影響が予想される。第二は隔離期間の要因である。一般には隔離期間が長いほどストレス効果は高いとみられるが，集団隔離の場合は凝集性の増大による social support 機能がストレス低減に作用することも考えられる。また第三として，隔離に到る契機が意図的で，社会的隔離が目的に対する手段である場合と，災害や外的強制などによる偶然的あるいは非意図的である場合の相違である。前二つの要因に関していえば，隔離というストレスフルな事態に共在する人々が，相互に好意を覚え親和的関係を発達させることは容易に生じうることである。藤原・黒川(1985)が初対面の二人の被験者を実験室にペアで8時間隔離したところ，最初に「相性が良い」と教示されたペアだけでなく，「相性が良くない」と教示されたペアも時間の経過とともに相手に対する親しみ易さの評価を高めていた。このとき，被験者の主観的不安は隔離直後に最大値を示してその後低下し，2時間後から実験終了まで低く保たれた。また，3人の被験者相互の関係を「相性の良い」相手と「相性の悪い」相手になるよう操作して隔離室内でパズルをやらせた場合，隔離4時間後から両者に対する親しみ易さの差が消失した（黒川・藤原，1985)。二人以上で隔離事態に置かれる場合，少なくとも数時間から一日程度の期間であれば，相互の親和的感情は増大する傾向があるようである。共同で隔離される日数が長くなれば，互いの要求や選好の差異が顕在化して敵意感情が発生することもあるであろう。数時間から一日程度の隔離においては，被隔離者の情緒的・認知的反応やストレス反応には，共在他者の初期印象や教示された相性の影響よりも，共在他者の現実の行動形態ないし期待される役割行動の影響が重要だと考えられる。

不安状況や嫌悪事態における共在他者の効果を検討した研究については，「電撃を受ける実験を待つ被験者の待合室の選択行動」を吟味した Schachter (1959) の実験がオリジナルとして知られている。電撃についての高不安群の方が低不安群より他者と一緒の待合室で過ごすことを望む率が高いことから，人が不安事態に置かれると親和欲求が高まるとされた。実際の嫌悪状況に晒されている間の共在他者の効果を検討したものとしては，Kissel (1965) の研究と Glass et al. (1970) の研究があげられる。Kissel は alone 条件，stranger 条件，および friend 条件の下で嫌悪的な課題を行わせ，GSRを用いて不安を測定した結果，低い不安反応が示されたのは親和性の高い friend 条件であるという，Schachter と一貫する結果を得ている。しかし Glass らの嫌悪スライドを用いた実験の結果は，親和性の高さが不安低減に結びつかないことを示している。

また，Zimbardo & Formica (1963) や Firestone et al. (1973) は，共在他者が被験者と共動作状況にあるか否かと親和性との関係を検討する実験を行っている。その結果，身体的脅威事態においては，共在他者が自分と同じ状況に置かれる共動作状態を好む傾向が見出されている。最近の研究では，横山ら (1985) が，電撃の到来を待つ不安状況において，被験者が共在他者と情緒支持的関係にあることよりも，一緒に電撃を受ける共通運命にあることの方が，不安低減に効果的であることを報告している。

これらの実験研究から示唆される共在他者の効果は，その多くが嫌悪刺激呈示の数分間とか，電撃到来までの数十秒間，といった短い実験期間について言えることである。また Schachter (1959) の実験は，電撃実験を待つ間に他者と一緒にいたいか否かを尋ねたものであり，結果的に不安が低減されるかどうかは不明である。実際に不安状況に置かれた場合の，対人関係の変化や情緒的・認知的諸反応の変動を知るためには，せめて数時間というオーダーの期間について共在他者の効果を検討することが必要である。

不安状況と親和欲求の関連性についての諸研究から一貫して示唆される点は，共在他者の不安低減効果が不安という情動反応に対する情緒支持的機能に由来するということである。そうであれば，共在他者の行動そのものが専ら情緒支持的である場合と，専ら課題志向的で情緒性支持性が欠けている場合では，不安低減効果が明らかに異なるであろう。

そこで本研究では，被験者１名に２名の実験協力者（共在他者：サクラ）を加えた３名集団を，閉鎖環境実験室に数時間隔離して共通の課題を与え，不安と対人認知や他者への役割期待等の変化を継時的に測定することで共在他者の効果を検討することにした。このとき，２名のサクラには互いに異なる二通りの役割行動を割り当てた。一つは課題を率先して行い，課題解決方法について情報を提供するが，情緒支持的言動は控える課題志向的役割である。他方は，場の雰囲気をリラックスさせ，不安や緊張を和らげるような行動を主として行い，課題解決にはあまり志向しない情緒支持的役割である。それぞれをリーダーシップPM論に準じてサクラP，およびサクラMと呼ぶ。

ところで隔離による不安は，複数隔離の場合，親和欲求の充足可能性が大であることなどから，単独隔離の場合にくらべて低いであろう。しかし，共在他者が時間経過とともに次第に減少し，最後に一人だけ事態に取り残される場合の不安は，最初から単独で隔離される場合よりむしろ強くなると思われる。共在他者が去ることによって生起する不安は，上述の観点に則していえば，サクラPが去る場合とサクラMが去る場合では異なることが予想される。本実験では，他者の共在状態によって隔離事態を３フェーズに設定した。すなわちフェーズ１は被験者とサクラ２名の３名共在事態である。フェーズ２は１名のサクラが場を去った２名共在事態であり，フェーズ３はサクラが２名とも去って被験者が一人で隔離されている事態である。フェーズ２で，サクラPが場を去りサクラMが共在する条件をPM条件，逆にフェーズ２でサクラMが場を去りサクラPが共在する条件をMP条件とし，これらを独立変数とした。従属変数としては，被験者の主観的不安と課題遂行意欲，二通りのサクラに対する印象評定と役割期待，彼らの演じる役割行動の認知評定，両サクラへの親和性について吟味する。実験の前提となるassumption は，このような隔離事態では不安が高まるので，親和欲求が増大し，共在他者に対してP機能よりもM機能への希求が強まる，ということである。検討を進めるために以下の５つの作業仮説をたてた。

(1) 隔離事態の時間経過とともに不安が増大し，課題への意欲が低下するであろう。
(2) 一般に，サクラMに対する印象評定は，サクラPに対する印象評定より親近性評定値が高いであろう。
(3) ２種のサクラが共在する事態では，サクラPに対するM機能の期待度が，サクラMに対するP機能の期待度より高いであろう。
(4) 一人のサクラが退去したフェーズ２では，共在するサクラに退去したサクラが演じていた役割をより強く期待するであろう。
(5) 単独事態のフェーズ３では，退去した二人のサクラのうちMに対する好意的印象の評価が高まるであろう。

方　　法

・被験者の選抜：初対面の他者と共に一定期間隔離されて作業するという本実験の性質に鑑みて，被験者の特性中，退屈への耐性，親和傾向，仕事志向性，および対人不安傾向を統制することが望ましいと考えた。そこで心理学を受講している男子学生計151名に pre-test を実施し，

その中から21名を被験者として選抜した。テストの内容と統制した範囲はつぎの通りであった。① Zuckerman, M.(1979)の感覚希求尺度(Sensation Seeking Scale)の「退屈さ」に関する10項目の合計得点が上位1/2以内，②PPT尺度(久保他，1977)の Person-orientation 尺度(8項目)得点が上位1/2以内，③PPT尺度の Task-orientation 尺度(8項目)得点が下位1/2以内，および④ Leary, M. R.(1983)の Interaction Anxiousness & Audience Anxiousness Scale の対人不安尺度14項目の得点が上位1/4から3/4までの範囲内にあること，を被験者の条件とした。

・実験協力者(サクラ)：被験者を装った4名の男子学生の一人が実験中専らP的行動を演じ，別の一人が実験中専らM的行動を演じた。先有傾向の個人差による印象の偏りを防ぐため，すべてのサクラはある時はP的行動を，他の時はM的行動を演じるよう割り当てられた。役割行動の内容はつぎのとおりである。

P的役割行動；課題に関する情報を提供し，率先して課題を行なう。被験者を含む共在他者に課題の解き方を教えたり，ヒントを与えたりする。また，「頑張ってやろう」，「そろそろ課題にもどろう」など，課題促進的な発言をする。

M的役割行動；場の雰囲気をリラックスさせ，被験者の不安を和らげる。「少し休もう」，「ゆっくりやろう」，「これ，難しいね」など，情緒支持的な発言をする。

・実験要因：サクラが場を退去する順序により，サクラPが先に退去しつぎにサクラMが退去して被験者のみが取り残される条件をPM条件，サクラMが先に退去しつぎにサクラPが退去して被験者が取り残される条件をMP条件とし，PM条件に11名とMP条件に10名の被験者をランダムに割り当てた。この2水準と時間（フェーズ1，2，3の3水準）を独立変数とする。

・実験装置：被験者らを隔離した閉鎖環境実験室は，面積8.3m²(3.1×2.68m)の防音・恒温室であり，概要は Fig.0-1. に示す通りである。室内には1台の机と3脚の椅子があり，衝立で遮蔽されたフリーザートイレが設置されている。内部の様子は2台のビデオ・カメラにより隣の観察室のモニターで観察され，VTRに記録される。内部の音声は観察室で常時聴取記録されるが，外部からの指示はマイクを通じて一方的に伝えられ，内部からの連絡は見掛け上不可能である。本実験では予め質問紙投入用ポストを設置し，被験者とサクラはそれぞれ質問紙セットと課題用具を携帯して室内に誘導された。隣室では録音録画とともに行動観察記録用紙を用いて行動を目視記録した。

・課題：各人にFORTRANプログラミング入門テキストとプログラム用紙を渡し，練習問題の簡単なものから順に解答していくよう求めた。因に，被験者はすべてFORTRANプログラミングの初心者であり，テキストを読みながら解答を試みた。

・手続き：①2名のサクラと面識のない被験者1名を別室に集合させて実験者が教示を行なった。この実験の目的が「学習行動に及ぼす共在他者の影響を見る」ことにあると告げ，課題の簡単な説明を行なった。また，個人の

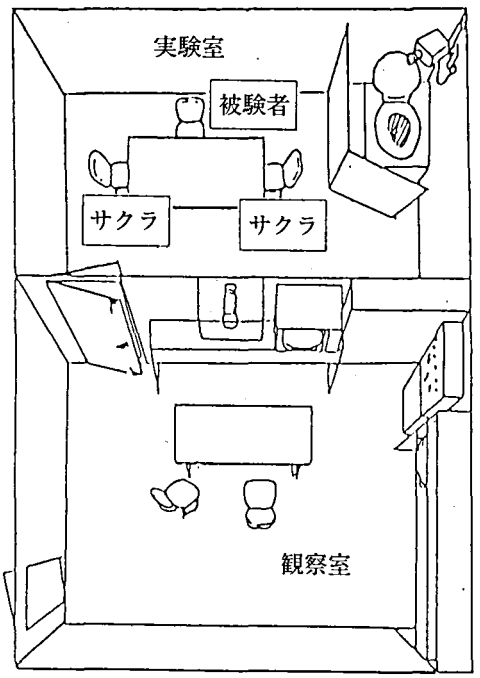

Fig . 0-1. 実験室の状況

能力評価が目的ではないので，課題は各自のペースで遂行して良いこと，会話や相談は自由であるが，所属学部や学年などの自己紹介に関する話題は避けるよう注意した（なお，実験中はそれぞれにA，B，Cのゼッケンをつけさせ，Aさん，Bさん，Cさんと呼称させた)。その後，各人に後述する質問紙セットを5部渡し，指示に従って1部ずつ記入すること，記入が終わるごとにそれまでに仕上げた課題解答とともに室内のポストに投入するよう教示した。(被験者には正確な拘束時間を告げなかったが，アルバイト謝金額などから8時間前後の仕事と予想していたようである)。②つぎに3名を閉鎖環境実験室に誘導し，Fig.0-1のように着席させた。室内から外部への連絡はできないこと，指示は外部からマイクで行なうことを告げ，1回目の質問紙による相互印象評定を行なわせた後，課題を開始させた。③課題開始後45分経過した時点で質問紙セットに回答させ，開始1時間後に「外でやってもらう仕事がある」という理由でサクラの一人を室外へ退去させた。④1時間45分後，先と同じ質問紙セットに回答させた。この時，退去しているサクラに関する質問は想起して回答するよう指示した。開始2時間後，同じ理由のもとに残っているサクラを退去させた。⑤被験者一人が室内に取り残されて30分経過後，質問紙セットに回答させ，実験終了を告げた。実験室内で親和性と関与度についてのチェックを口頭質問した。⑥隔離中の室内状況は被験者に気付かれずにモニター・カメラで観察記録された。目視記録は主に(a)誰から誰への発言か，(b)発言内容がP的（課題に関したこと）であるかM的（課題以外の緊張緩和的なもの）であるか，の2点について行なった。

・従属変数の測度：質問紙セットの構成は以下のようであった。①主観的不安尺度AACL (Zuckerman, 1960)。「心配な」「不安な」など10項目に「非常にあてはまる」から「まったくない」までの5段階評定。これに「眠い」と「退屈な」の2項目を加えた。②「明るい－暗い」「まじめな－ふまじめな」などの形容詞対から成る対人印象評定11項目。③PM行動認知評定。サクラのPやMの役割がどれだけ認知されているかのチェックのため，「Aさんは雰囲気を和やかにしようと気を配っている」，「Bさんは仕事上の的確な助言をする」など4項目に，「全くそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階評定。④共在他者のP的行動とM的行動の希求度を測定するため，「Aさん(Bさん)に次のようなことをどれくらいして欲しいと思いますか」として，「雰囲気を楽しくするような配慮」，「仕事にやる気を出させるような激励」など5項目に5段階評定。⑥課題への意欲。「仕事に興味が持てる」などの3項目。②③④は二人の共在者それぞれについて回答を求めた。

実験終了時の親和性と関与度のチェックは，「一人になったとき，誰かに側にいて欲しかったか」，「実験中，仕事以外の話をしたかったか」など8項目を質問し，その後に内省報告を口頭で求めた。

結果と考察

・役割行動の操作チェック：(1)サクラのP的行動とM的行動の演技操作が成功しているか否かを吟味するため，行動観察記録からサクラPとサクラMのP的発言とM的発言の回数をフェーズごとに検討した。符号検定の結果，全てのフェーズにおいてPはP的発言が多く，MはM的発言が多いという有意な結果を得た。(2)それぞれのサクラの行動を被験者がどのように認知したかに関して，P的側面の行動とM的側面の行動の認知得点についてそれぞれ分散分析を行なった。P的行動については，サクラの役割の主効果があり〔F (1,18)＝69.06，p<.01〕，サクラP ($\bar{x}$＝7.77)の方がサクラM ($\bar{x}$＝4.78)よりもP的行動を高く認知評定されている。また，M的行動についてもサクラの役割の主効果があり〔F (1,18)＝32.17，p<.01〕，サクラM ($\bar{x}$＝7.87)の

方がサクラP（$\bar{x}$=6.27）よりもM的行動を高く認知評定されている。(1)，(2)から，実験条件の操作は成功したものといえる。

・実験結果と考察：

①主観的不安AACLと課題への意欲：まず，AACLについて因子分析を行なったところ，大きく「不快」と「不安」の因子に分かれた(Table 1-a.)。そこで，仮説1を検討するため，「不快」度，「不安」度および課題への意欲について，2要因の分散分析を行なった。結果はFig.1. に示す。3項目とも時間の主効果が見られた〔F (2,38)＝10.53, p<.01〕，〔F (2,38)＝5.66, p<.01〕，〔F (2,38)＝5.49, p<.01〕。被験者が一人になったフェーズ3で不快と不安は最も高く，課題への意欲は最も低下している。このことは仮説1を支持している。つぎに，課題の遂行量（解答した問題数）のフェーズごとの平均値（Table 1-b.）についてt検定を行なったところ，PM条件，MP条件ともフェーズの進行に伴って遂行量が有意に低下していた。また，全体的には条件間で遂行量の差はなかったが，フェーズ2においては，MP条件の方がPM条件よりも有意に遂行量が多かった。これは，フェーズ2で残っているサクラのP的行動の影響だと思われる。

②対人印象：対人印象評定項目について因子分析を行なったところ，「親しみやすさ」と「専門性」の2因子が抽出された(Table 2.)。仮説2を検討するために，両因子項目について3要因の分散分析を行なった。まず，「親しみやすさ」については，サクラの役割行動の主効果が見られ，〔F (1,17)＝15.75, p<.01〕，サクラM（$\bar{x}$=5.13）の方がサクラP（$\bar{x}$=4.45）よりも親しみやすいという印象を被験者に与えている(Fig. 2-a.)。これは仮説2を支持する結果である。一方「専門性」については，サクラの役割行動の主効果〔F (1,18)＝30.48, p<.01〕と条件×時間×役割の交互作用〔F (2,36)＝9.80, p<.01〕が認められた。サクラP（$\bar{x}$=5.37）の方がサクラM（$\bar{x}$=4.54）よりも専門性が高いという印象を与えている。また，MP条件では，サクラMの退去後に彼に対する専門性の印象評定値は低下するが，PM条件ではサクラMが退去しても彼の専門性への評定値は変わらない(Fig. 2-b.)。MP条件では，サクラMの退去後に専門性の高いサクラPが残っているため，対比的にMの専門性の印象が低くなったものと考えられる。

Table 1-a.　不安尺度ＡＡＣＬの因子分析結果

因子	項　　目	FACTOR 1	FACTOR 2
不快	＊穏やかな	0.69	0.39
	＊楽しい	0.85	0.14
	＊愉快な	0.84	0.09
	＊気持ちのよい	0.83	0.09
	退屈な	0.71	0.07
不安	心配な	0.11	0.84
	不安な	0.02	0.90
	おそろしい	0.17	0.68
	落ち着かない	0.31	0.61
	緊張した	-0.16	0.77
	眠い	0.23	-0.08
	うろたえた	0.39	0.30

注１：「眠い」「退屈な」は追加項目。
注２：＊は逆転項目。

③共在他者へのPM役割期待：仮説3，4を検討するため，共在他者のM的行動への期待度とP的行動への期待度について3要因の分散分析を行なった。その結果，M的行動への期待度については有意な差異を見出せなかった。これは仮説に沿って予想される方向に反する結果である。しかし，P的行動への期待度については，サクラの役割行動の主効果〔F (1,17)＝26.13, p<.01〕と，条件×時間の交互作用〔F (2,34)＝6.46, p<.01〕が見られた。サクラPに対す

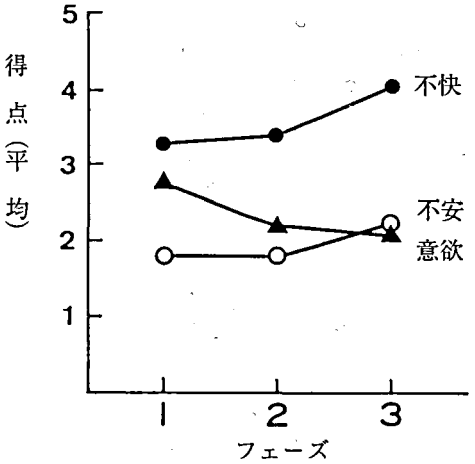

Fig.1.　時間別に見た主観的不安と課題への意欲

Table 1-b.　課題回答数（平均）

条件＼フェーズ	1	2	3	計
PM	5.6	3.1	1.9	10.6
MP	5.2	4.1	2.1	11.4

Table 2.　対人印象評定の因子分析結果

因子	項目	FACTOR 1	FACTOR 2
親しみやすさ	(7) — (1)	0.91	-0.14
	明るい — 暗い	0.92	-0.03
	親しみやすい — 親しみにくい	0.81	0.30
	心の広い — 心の狭い	0.84	0.37
	感じの良い — 感じの悪い	0.68	-0.04
	積極的 — 消極的	0.89	-0.22
	ユーモアのある — ユーモアのない		
専門性	まじめな — ふまじめな	-0.33	0.80
	素直な — 意地っ張りな	0.29	0.74
	信頼できる — 信頼できない	0.35	0.78
	知的な — 知的でない	-0.10	0.86
	ひかえめな — でしゃばりな	-0.50	0.57

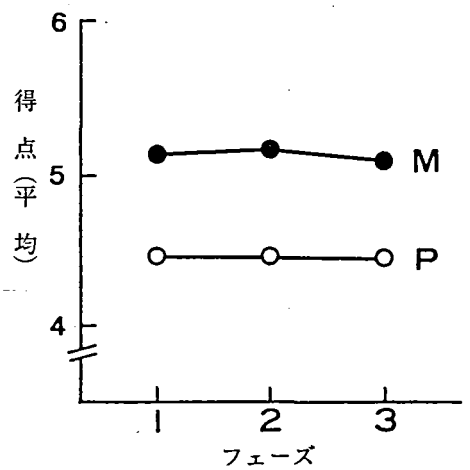

Fig.2-a.　役割・時間別に見た親しみやすさの印象

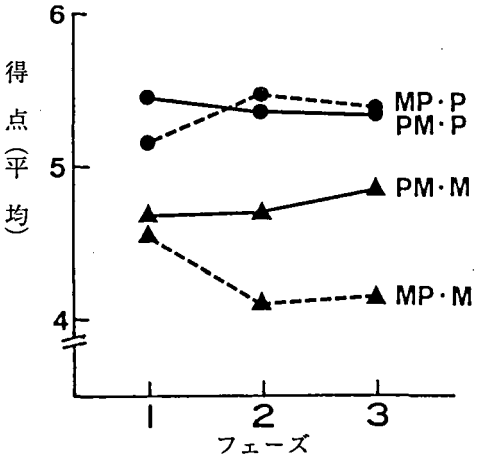

Fig.2-b.　条件・時間・役割別に見た専門性の印象

るP的行動への期待度（$\bar{x}$=7.39）は，サクラMに対するP的行動への期待度（$\bar{x}$=6.07）よりも高い。また，PM条件では，フェーズ2でP的行動への期待が高まり，フェーズ3で下がっているが，MP条件ではフェーズ2で期待が下がり，その後また高まっている（Fig. 3.）。いずれの条件においても，サクラPの退去直後にP的行動への期待度が上昇している。よって，仮説3と仮説4はともに支持されなかった。全般的に，本実験の結果は，M的行動への期待よりもP的行動への期待が強く出現することを示している。

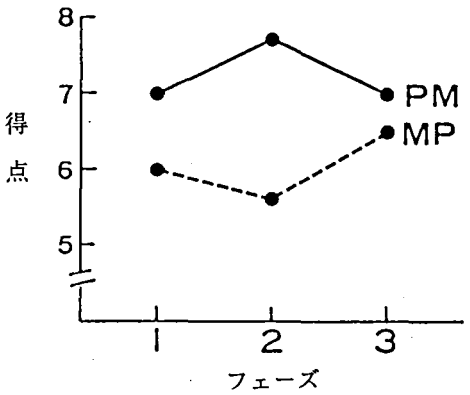

Fig.3.　条件・時間別に見たP的役割への期待

④親和感情と関与度：既に②で述べたように，対人印象評定の「親しみやすさ」得点にフェーズによる変動が認められなかった（Fig. 2-a.）ことから，仮説5は否定されている。ここで，実験終了直後の「一人になったとき，他の二人のうちどちらの人に一緒にいて欲しかったか」という質問の結果を見てみる。PM条件では2名がサクラP，9名がサクラMを選好した。一方，MP条件では10名全員がサクラPを選んだ。つまり，果たした役割行動の内容に関係なく，長時間一緒にいた人を望ましい共在他者として選んでおり，ここでも仮説5に反する結果となった。また，「実験中，部屋の外に出たいと思ったか」という質問には，MP条件の方がPM条件よりも強く「出たかった」と回答している（t=2.36, df=19, p<.05）。このことから，サクラMの退去によって，場の雰囲気が不安やストレスの高まる方向に変化した可能性は推定できるが，その結果として特にサクラMを選好するという傾向はなかった。

⑤サクラの行動の認知について：サクラの行動の被験者による認知評定については，操作チェックの項で述べたが，M的側面の行動についてはさらに時間×役割の交互作用〔F (2,36)＝4.37, p<.05〕と，条件×時間×役割の交互作用〔F (2,36)＝4.37, p<.05〕が見出された。この結果を，P的側面の行動の認知についての結果と対比して Fig.4. に示す。P的行動の認知についてはこのような交互作用は見られない。行動のM機能はP機能に比べて直接伝達的であり，その場に共在してはじめて機能する対面的性質をもっていると考えられる。加えて，PM条件では退去後のサクラMに対するM行動の認知評定に変化がない点から，この現象は共在時間が短いために生じた可能性もある。P機能とM機能の性質についてさらに考察すべき課題であり，長時間の集団隔離事態での実験的検討が必要であろう。

今回の実験では，社会的隔離事態の時間的経過とともに主観的不安尺度の得点が上昇し，課題への意欲が低下する現象がみられた。このような現象にもかかわらず，親和的なM的行動機能への希求は高まらず，むしろP的行動機能を求める傾向が現れ，当初の予想に反する結果となった。今回は，被験者に対して，実験室から解放されるまでの所要時間や課題のもつ意味などを明確にすることを意図的に避けた。このような曖昧な事態では，情緒・支持的な行動よりも，当面の課題や事態に関する的確な情報の方がより必要とされたようである。この結果の説明になりそうな二つの理由が考えられる。一つは，課題解決行動が不安低減の対処方略としての意味をもち，課題を遂行するのに必要な情報を提供する他者のP的行動がより必要とされたということである。いま一つは，全体的に主観的不安尺度得点が低いことから，不安を低減するための他者の情緒・支持的行動を必要とするほどの不安事態が創出されていなかったという

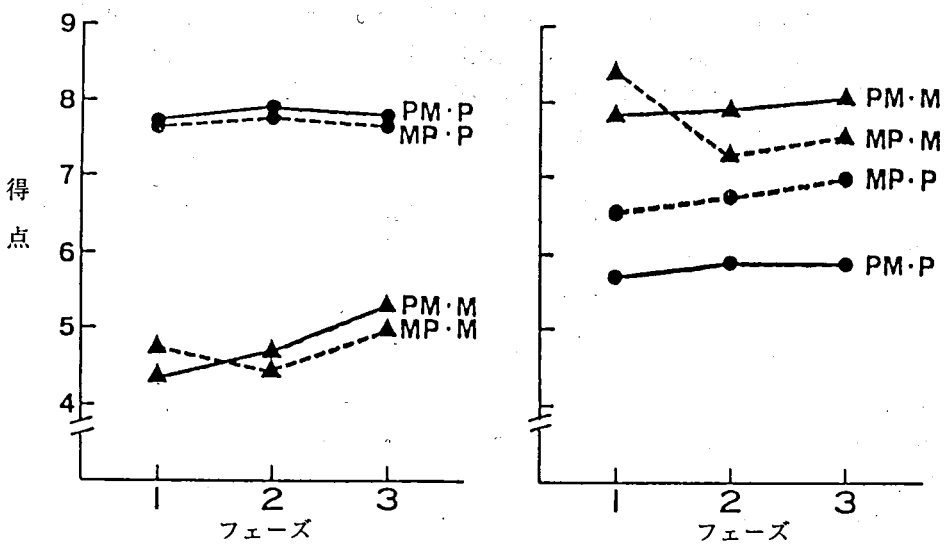

Fig.4.　条件・時間・役割別に見たP的役割の認知（左）とM的役割の認知（右）
注）〔PM・P〕はPM条件のサクラPに対する認知得点を表わす。他も同様。

ことである。不安が親和欲求を喚起するには，相当程度の不安の強度が必要かも知れない。これらの点を明らかにするためには，さらに高不安事態での長時間の実験が必要であろう。また，今回の課題は，あまり退屈しない程度で，かつ動機づけられることもない，中性的な課題を想定してFORTRANプログラムの作成課題とした。しかし本研究のように，共在他者の情報提供的行動と情緒支持的行動が不安に及ぼす影響を検討する目的の場合，課題の性質が重要な役割を果たすことも考慮しておかねばならない。今後は課題条件の比較検討も必要である。

要　　約

本研究は，社会的隔離事態における共在他者の行動が，親和欲求と課題遂行に及ぼす効果の吟味を試みたものである。共在他者の特性として，主に課題志向的行動を演じる者と，主に情緒・支持的行動を演じる者を比較した。

課題志向的な役割を演じるサクラPと，情緒・支持的な役割を演じるサクラM，および被験者(男子学生)の3名からなる21集団がそれぞれ閉鎖環境室に数時間隔離された。21集団のうち11集団では，隔離1時間後にサクラPが室外に去り，さらに1時間後にサクラMも室外に出て，被験者のみが残された(PM条件)。他の10集団では先にサクラMが去り，つぎにサクラPが去った（MP条件)。

被験者の不快と不安は一人残された時に最高になり，課題への意欲は最低になったが，条件間に差はなかった。サクラMに対する親しみやすさは，サクラPに対するそれより大であった。MP条件下では，退去した直後のサクラMに対する専門性の評価が低下したが，PM条件下ではそれは変化しなかった。どちらの条件下でも，被験者はサクラPが去った直後に他者(サクラ)の課題志向的行動を強く希求していた。一方，被験者の実験室の外に出たいという願望は，MP条件での方がPM条件でよりも強かった。サクラMの不在によって不安が高まったと推定できる可能性があった。また，MP条件下ではサクラMが去った後，彼の情緒・支持的行動への評価は低下した。しかし被験者の情緒・支持的行動への希求度は変化しなかった。これらのこ

とから，被験者は隔離によるストレスや不安の低減のために親和的な情緒・支持的行動を求めようとせず，これらの対処方略として課題解決行動を行なったものと考察された。また，他者への親和欲求を高めるほどの不安はある程度の強さが必要であり，本実験では隔離事態が十分高い不安を創出しなかったことも考察された。

本研究は，昭和61・62年度文部省科学研究費補助金(一般研究B　課題番号61450016　代表者　黒川正流）の助成によるものである。

引用文献

Firestone, I. J., Kaplan, K. J., & Russel, J. C. 1973 Anxiety, fear and affiliation with similar-state others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 26, 409-414.

藤原武弘・黒川正流　1985　隔離が対人関係に及ぼす効果に関する実験的研究　広島大学総合科学部紀要Ⅲ，9，67-75.

Glass, D. C., Gordon, A., & Henchy, T. 1970 The effects of social stimulation psycho-physiological reactivity to an aversive film. *Psychonomic Science*, 20, 255-256.

Kissel, S. 1965 Stress-reducing properties of social stimuli. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 378-384.

久保良敏・黒川正流・吉森護・生和秀敏　1977　仕事と動機ーPPT尺度の標準化ー　産業行動研究会

黒川正流・藤原武弘　1986　閉鎖環境条件下における小集団発達過程の検討　文部省科学研究費補助金(一般研究 A)研究成果報告書 57-62.

Leary, M. R. 1983 Social Anxiousness : The construct and its measurement. *Journal of Personality Assesment*, 47, 66-75.

Schachter, S. 1959 *The Psychology of Affiliation : Experimental Studies of the Sources of Gregariousness*. Stanford University press.

横山・黒川・生和・岩永　1985　不安に関する実証的研究(18)　日本心理学会第49回大会発表論文集　3-682.

Zimbardo, P. G. & Formica, R. 1963 Emotional comparison and self-esteem as determinations of affilliation. *Journal of Personality*, 31, 141-162.

Zuckerman, M. 1960 The development of an affect adjective check list for the measurment of anxiety. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 457-462.

Zuckerman, M. 1979 *Sensation Seeking : Beyond the optimal level of arousal*. New York: John Willy & Sons.